

佐賀市街部水路網に対する住民意識

佐賀大学理工学部 ○学 永橋浩三 学 斉藤 剛
同 上 学 野原昭雄 正 荒木宏之
正 古賀憲一

1. はじめに

低平地に張りめぐらされた佐賀市街部水路網(クリーク網)は、用水・排水路として人々に利用されると同時に、身近な水辺として親しまれてきた。しかし、一部の水路では下水道整備の遅れ、浄化用水量の不足などから水質汚濁が進行し、住民のクリークに対する親しみが失われつつある。本研究は、クリーク網の水質、クリーク清掃活動に対する住民の意識調査を行い、人と水辺が共存できる佐賀クリーク網のあり方を検討するために行ったものである。

2. 佐賀クリーク網の自然的条件及び住民清掃活動の背景

筑後川の流域に広がる佐賀平野は、筑後川、嘉瀬川などの河川によって運ばれた土砂が下流部に堆積し、干満の差が6mにも及ぶ有明海の潮汐作用によって自然陸化した低平地である。平野北部の筑紫山脈は、浅い山脈で樹木が少なく、また花崗岩で覆われているため保水力が乏しく、流失もひどい。さらに低平地河川のために河川の排水能力は極めて小さい。

佐賀クリーク網の清掃活動は、昭和55年発足した「佐賀市水対策市民会議」と各自治会が中心となって、毎年、春秋2回「川を愛する週間」として実施されている。春には泥土揚げ、秋には草刈を行う。市民の意識も向上しつつあり、平成2年春、秋、共に延べ20000人以上の参加があった。その結果、水面に浮かぶゴミなどはかなり減少し、水質に関しても徐々にではあるが効果が現れてきている。しかし、下水道が整備されるまでは、水質改善効果の限界があることに加え、清掃参加者が高齢、女性に偏っているなど継続していくにあたっての課題が残されている。

3. アンケート調査方法

佐賀市街の代表的な4地区において、1地区につき210部(計840部)のアンケート用紙を市役所・自治会を通して配布、回収を行った。4地区での平均回収率は73.3%である。

4. 調査地区概要(街並み)及び各地区の集計状況

A地区(八幡小路) {回収率48%}・・・新旧混住の住宅街である。下水道整備地区であり、多布施川からの流入によって水質はかなり良い。護岸は整備されている。

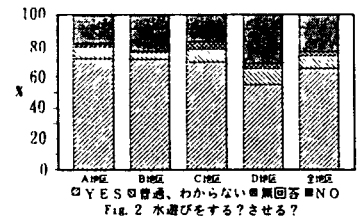
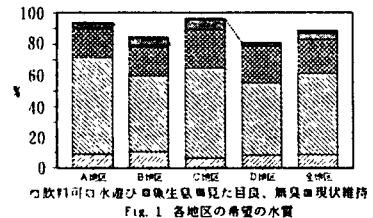
B地区(天神1・2丁目) {回収率78%}・・・事業所と住宅の混住地区である。クリーク幅は広く清掃活動が困難なところも存在する。護岸は未整備のところが多い。水深は浅く、ヘドロの堆積しているところが多い。下水道未整備地区で水質は良くなく、A地区とC地区の中間程度である。

C地区(愛敬) {回収率68%}・・・飲食店が多く、クリークにおけるゴミがめだつ。下水道未整備地区で水質は悪い。

D地区(草場) {回収率99%}・・・住宅地であり、最近ではマンションなどが多く建設されている。下水道未整備地区で雑排水の影響により水質は非常に悪い。

5. 考察

分析は主に地域別に行った。Fig.-1 {希望の水質は?} において各地区とも50%以上の人が「水遊びができる」水質を希望している。Fig.-2 {水遊び願望度} において水質が悪いためと思われるがD地区の水遊び願望度は低い。Fig.-1.2より、住民は水遊びに対する希望、水辺と接したい気持ちがあるといえる。Fig.-3 {ク



リークはきれい?} に対して水質が中程度のB地区でのみ「汚い」と感じている人が多いのは、この地区ではクリークが建物によってさえぎられているところが多く、主に景観上の理由によってクリークの印象が良くないためと思われる。いずれにしても、水質が悪い地区では明確に「汚い」と感じていることがわかる。Fig.-4 {清掃の主体は?} から、A、D地区では「役所と自治会が協力して行う」という意見が多くなっている。A地区は水質が良いので、必然的に「きれいな水を汚してはならない、守っていききたい」といった気持ちの裏付けとして、清掃の意欲が高くなっていると考えられる。水質の悪いD地区でも、クリーク清掃の必要性を認識している人が多い。Fig.-5 {清掃は軽作業? 重労働?、参加人数} から、過半数の人々が「重労働」と答えている。清掃活動はボランティアであり水辺で遊んだことがあるなどの「原体験」をもつ人々、特に年輩の方達によって支えられている。¹⁾したがって、若い世代も含めた住民による、快適な清掃活動のあり方を考えることが今後の課題といえよう。Fig.-6 {清掃へ参加するか?} Table-1 {世帯参加率} から世帯参加率とFig.-6の参加意志とを対比させた場合、D地区では、世帯参加率が0.74であるの対し参加意志は0.42と、他の地区と比較して意志に対する実際の参加率が高い。さらにFig.-4において、「住民参加型のクリーク清掃であるべきだ」という意見がD地区で多かったことを含めて考えると、D地区の住民は水質が悪いので「清掃をしなければいけない」という義務感が強いものの、水質が良くないことによる「あきらめ」の気持ちとなつて参加への意志が低くなっていると考えられる。Fig.-7 {クリーク保全基金} 「もしお金を出すとしたら」との問いに対して、約60%の人々が基金案に賛成している。¥1000を一応の境界として考えると水質が良い地区ほど基金に協力してもよいとする人々が多く、「クリーク保全」に対する要求が強いといえる。

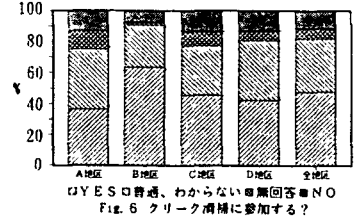
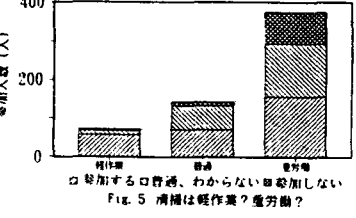
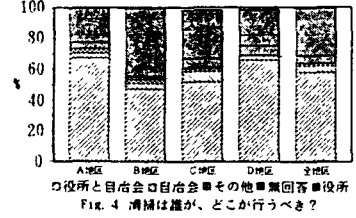
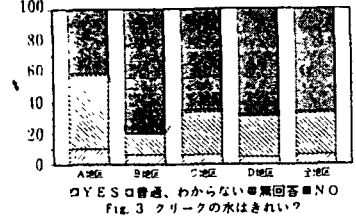
6. まとめ

今回の調査で、住民は「クリークの必要性」を認識していることがわかった。さらに「水遊びができる」良好な水質を望んでおり、これは水遊びをしたいという希望の表れであるといえる。また、この水質を実現するための清掃活動に対してある種の疲労感を感じつつも、清掃への参加意志は強く、清掃を「役所と自治会」が協力して行うという認識が強いこともわかった。

佐賀クリーク網を、水遊びができるような清流に戻し、維持していくためには、住民の存在は不可欠である。住民が自発的に、楽しくクリーク清掃に参加するような雰囲気づくりが今後必要であろう。

本研究において貴重なご意見を頂いた住民の皆様へ深く感謝致します。

参考文献 1) 白石、古賀、荒木、井前『佐賀市内クリーク網に対する住民意識』：土木学会西部支部(1990.3)



地区	A地区	B地区	C地区	D地区
人口 (人)	111	444	699	1120
世帯数 (世帯)	205	248	381	467
清掃参加人数 (人) 昨	26	114	130	379
秋	35	112	120	309
平均世帯参加率(人/世帯)	0.15	0.46	0.33	0.74

